

病気になるという一人であることが辛くなるということを知った。

ピピッと音がして脇に挟んでいた体温計を取り出した。液晶に表示されたのは38.2℃という普段目にしない数字だった。

「これは一昨日の麻雀が原因だろうな」

一昨日の夜は仲のいい大学の友達と試験が終わったことを喜び徹夜で麻雀をしたのだった。その中に風邪菌の所持者がいたのだろうか、今まで徹夜で麻雀をしたところで風邪をひいたことなどないダイキにはそれしか思い当たる節はなかった。

「なんでだよ。誰だよ、風邪菌持ってた奴。試験明けだからってゆるみすぎだろー。ってそれは俺も同じか」

風邪ひいた時ってどうすりゃいいんだっけ。薬飲めばいいんだよな。あ、その前に何か食べなきゃ行けないんだっけか。でもそれ以前に菓なかったよな。食べ物もそこまでなかったし、それにカップ麺も切らしてたな。

そんなことを考えていた。一人暮らしの部屋に置いてある食べるものは限られていて、その上試験期間中に買い足しをする余裕もなく、試験が終わってから買いに行く予定だったため、ダイキの部屋には飲み物以外何も無い状態だった。

「彼女の一人でもいたら、こういう時助かるんだろうな」

彼女。そう言って思い出すのは大学に入って知り合ったハル。

篠崎ハルに初めて会ったのは大学のサークルだった。サークルで出会ったハルはいつでも本を持ち歩いていて、暇さえあれば本を読んでいるいわゆる本の虫というものだった。そのサークルは本を読んだりするような者はほとんどおらず、ハルはサークルのなかでも異色を放っていた。そんな彼女にダイキが自ら話しかけることはなかった。

そんななか、ダイキが初めてハルと言葉を交わしたのは新入生歓迎会も終わり、講義にも慣れてきた五月の末だった。

「なんでだよ」

その日は一コマだけの講義だけで、それが終わればバイトもなく同じ講義をとっているサークルでできた友達と遊ぶ予定だった。それなのに、その友達が急用で講義を休み、そのあとの約束も次の機会に回されたのだった。それだけであればダイキもそこまで落ち込むことはなかった。その講義ではテキストを使って進めているのだが、あいにくとダイキはそのテキストを購入しておらず、友達から見せてもらおうというスタンスをとっていたのだった。それが今回災いした。テキストがなければ内容は全く分ならず、出席していても意味がない。それでもこの講義は再履修になれば単位取得するハードルが高くなるという噂を耳にしていたため、ダイキには休むという選択肢は存在しなかった。講義が行われる教室はそれほど広くもなく、テキストを見ていなかったり、ほかのことをしていたり、私語をしようものならすぐに教授の目にとまり退室させられてしまう。これは諦めて休むかと思つた時だった。

「よかったら、一緒にテキスト見ます？」

そう声をかけてくれたのがハルだった。机に突っ伏していたダイキの目線に合わせて彼女はしゃがんでいた。

「すごく困ってるみたいだったから声かけたんだけど。私、同じサークルに所属してて君を見たことがあったから」

迷惑かな、とハルは首を傾けた。その仕草を計算してやっていたのであればダイキも断っていたのだが、ハルからはそんな空気はしていなかった。

「ラッキー。助かるよ」

ハルが座れるようにと成りの椅子に座り直した。ハルのおかげで講義中に困ることはなく、とりにいる人間が違うというだけでいつも以上に集中して講義を聞くことができた。

「よかったー。篠崎さんが俺のこと見つけてくれてさ」

講義中に二人はお互いの名前を知り、敬語が抜けるまでになった。

「流石に大教室じゃ無理だったけど、あの教室だったらさすがにわかるし栢野くんたちって目立つからいるって知ってたんだよ」

「よく、俺らのことしってたな」

「なんとなく見たことあるなーって最初は思ってた、最近になって同じサークルの人だって確証持ってたんだよ」

「よく確証もてたな。俺だったら忘れてると思う」

「うん。自分でもびっくりだよ。私って人の顔覚えるのって苦手なんだけど、栢野くんは覚えてたからね」

ほんと、奇跡に近いよー。とハルはその名のとおり春の日向のような笑顔で笑った。

「ねえ。篠崎さんはこのあと講義入ってたりするかな？」

テキスト見せてくれたお礼したいんだけど。とダイキは切り出した。もともとは他の友達と遊ぶはずだったが、キャンセルされたためにぼっかり空いてしまったのだ。

「ないよ。いつもこの曜日はこの講義で終わりなんだ」

「だったら、一緒にご飯行かない？」

「いいよ。あ、私のことは篠崎じゃなくてハルでいいよ。私も栢野くんのことダイキって呼ばせてもらうから。苗字呼びつてよそよそしくて苦手なんだ。いいかな」

「なんとでも。別に呼び方にこだわりとかってないし」

その会話がダイキとハルの始まりだった。

彼女彼女の関係になるのにそう時間はかからず、夏休みが始まる頃にはお互いについてはほとんど知っていた。ダイキもハルも一人暮らしだということ。実はハルは入学して間も無い時期からダイキのことを知っていたということ。そして好きな本やテレビ番組に始まりお気に入りのお店など、知らないことはほとんどなかった。休みの日にはデートをしたり、お互いの交友には深く口出ししたりせず二人の恋愛は順調だった。

そんな二人の關係に亀裂が入ったのは二年生の秋だった。すでに二十歳になり飲酒をしても許

されるようになったダイキは毎週末友人先輩らと共に飲み会に興じるようになっていた。しかし一人暮らしをしている学生の財布にはそれは大きな痛手であったため、必然的にバイトの時間が増えていた。毎日がバイト、週末には飲み会。ハルと会う時間は極端に減っていた。ダイキ自身、それをわかってはいたが付き合いもあり、その流れを断ち切ることはできずにズルズルと時間だけが過ぎていた。

そしてクリスマスを目の前に控えたあるのことだった。

「篠崎さんが男に口説かれてるの見ただけど、栢野くん知ってた？」

そう言ったのは同じサークルの女の子だった。その子が嘘を言うようなタイプではないことは大学に入ってから付き合いでよくわかっていた。だから疑うことはなかった。

俺のせいだ。

すぐにそう思った。ハルと会う時間がほとんどないのは自分が飲み会に行き、そのためにバイトをするような生活に溺れているから、自分がしつかりでいていないから隙ができたんだ。ハルは悪くない。悪いのはハルの気持ちを考えることができなかった俺だ。

「大切な話なのに電話でごめん。今言わなきゃ行けないと思ってな」

ダイキは携帯からハルのアドレスを呼び出し、電話をかけていた。ダイキの様子を知らないハルは珍しくダイキから電話がかかってきたことに驚き喜んでいた。

「なに？ダイキが電話してくるとか珍しいね。なにかあった？」

「多分、いや結構重大なことに気づいたんだ。今まで飲み会とかバイトとかにかまかけてハルと会う時間作れなかったって。だからさ」

別れよう。

そのあとのことは詳しくは覚えていない。ただ覚えていることはハルが泣いていたこと。そしてダイキの頬にも涙のあとがあったこと。

それ以降、ハルと二人きりで顔を合わせることはなくなった。仮に合ったとしてもお互いに別の人と話していたり、移動中にすれ違ったりするくらいだった。ハルは何か言いたげだったが、そういう雰囲気にはならなかった。そうして半年が過ぎた。

飲み会は断るようになり、バイトも必要以上に行かなくなった。その代わりに仲のいい友人と徹夜で麻雀をしたり学生生活を金をかけずに満喫するようになった。その結果が、今回の高熱につながったのだ。

「さすがに、もうしんどいかもな」

ダイキの意識が朦朧となりかなり重症であることがわかる。それでもこの部屋にはダイキ一人だけしかいないため、どうしようもないのだ。

「なによ。久しぶりに来てみたら、このザマ」

誰かにメールを打とうとした時だった。懐かしい声がした。

「まさか本当に熱出して倒れてるなんて。サークルの連絡メールに返信がないから見てきてくれて言われただけなのにな」

顔を横にするとそこにはハルが立っていた。

「なん、で」

「電話にも出ないから私が駆り出されたんだよ。感謝してほしいんだけど」

一方的に別れを切り出して、でもまだ未練が残っていて。そんなダイキの気持ちを知ってか知らずかハルは持つてきたものを取り出していた。

「どうして、だよ」

「よく思い出してよ。私まだ合鍵持つてるんだよ。返してないんだから入れるに決まってるじゃない」

ゼリー飲料に熱さまシートに薬に、袋には病人に必要なものが揃っていた。

「いや、そうじゃなくて」

重い体を起こそうとしたが力が入らず、ダイキはそのまま尋ねた。

「ていうことだけじゃないんだけどね」

そう言っつてハルは照れくさそうに笑った。

ああ、やっぱりまだハルのことが好きだ。手放したくない。

ダイキは改めてそう思った。だがそれはダイキのわがままでしかない。

「熱出してるつてのをダイキの麻雀友達から聞いて今しかない、これでダイキに会う口実ができるって思ったの」

あのね――